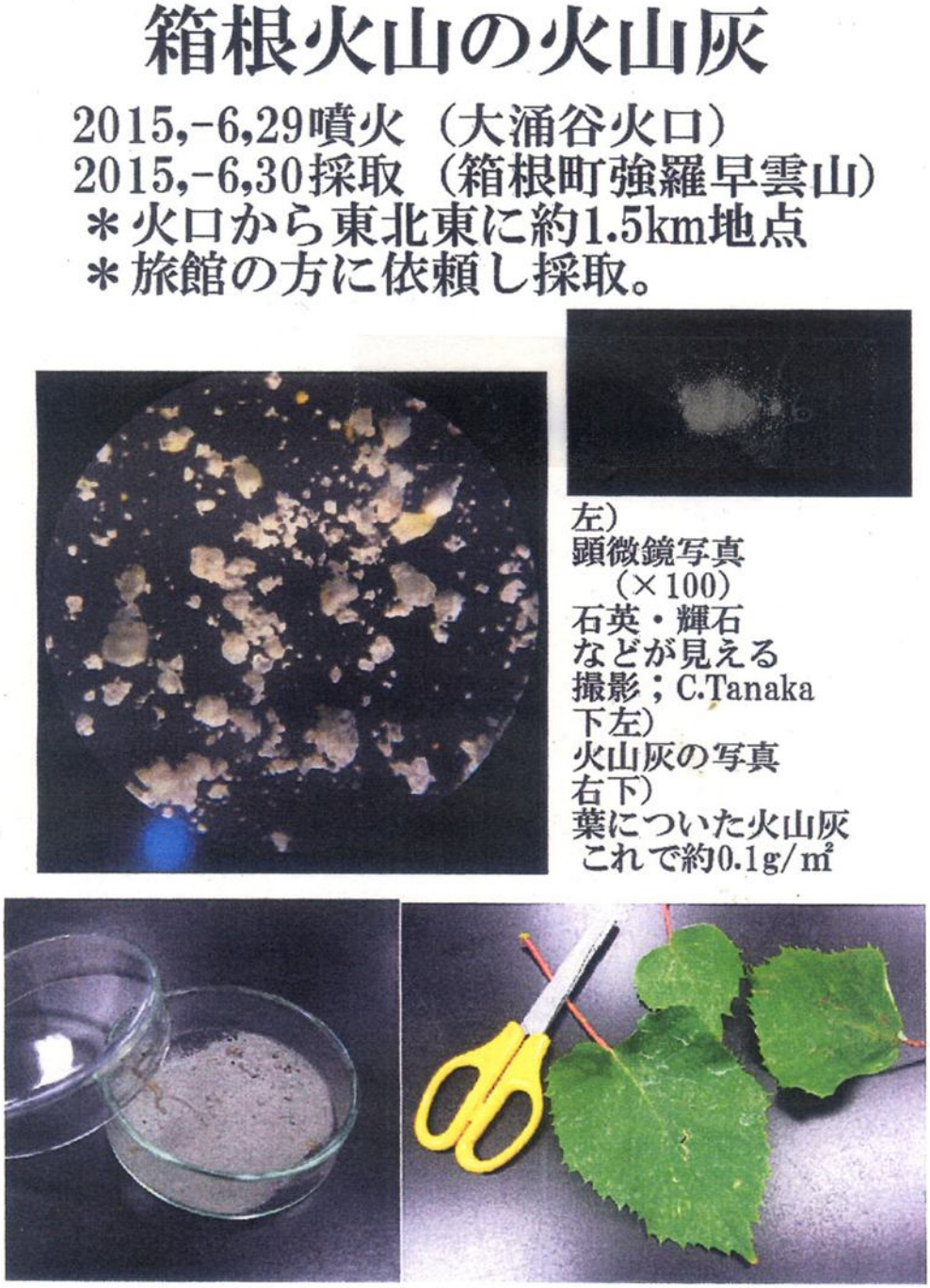
「日々の理科」（第 365 号） 2015（H27),-7,-3

「少量の火山灰を配布する」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

6 月 29 日から 30 日にかけて、断続的に噴火をした箱根山の大涌谷。大涌谷は箱根山の中央火口丘の山腹に位置する「噴気地帯」の一つに過ぎなかったが、これで「大涌谷噴火口」という堂々たる名称を名乗ることになった。しかし今回の噴火は極めて小規模なもので、噴出した火山灰もごく少量だった。

火山の噴火口から固形物（固体の岩石や鉱物　たとえば火山灰）が噴出すれば、その時点で「噴火」と呼ぶ。一口に火山灰といっても、液体だったマグマの頭部（最も地表に近い部分）が大気中に「霧状」に放出され、瞬時に冷却・固結したものと、水蒸気や火山ガスなどの激しい噴気で、もともとあった砂礫が吹き上げられたものの２種類がある。今回の火山灰は後者のタイプで、直接マグマが噴出したわけではない。



しかし、箱根山が「噴火」をしたのは、実に 12 世紀以来のことである。近代火山観測が始まってからは、もちろん初めての噴火となる。当然、その火山灰は記念碑的存在といえる。

現地強羅早雲山から送られてきた火山灰は、数グラムであった。一部は今後の試料として残し、残りは５年生の子どもに配ることにした。

たくさんあれば、チャック付きのポリ袋で配布できる。しかし、今回のものは一人分が耳かき１杯にも満たない。私は大急ぎでプリントを作成した。その一部の背景を黒くして、そこにテープで火山灰の実物を貼って渡したのである。僅かな量ではあるが、昨日噴出したばかりの火山灰の実物を手にして、子どもたちは、大いに驚き、大切そうに持ち帰った。

「箱根山火山灰プリント」
作成；C. Tanaka